広島県呉市『大和ミュージアム』へ
蘇る日本の歴史

日本の防衛の要として、造船業の街として栄えた呉。歴史と技術を読み解き、戦争の悲劇と平和について、記者（西）は学んだ。

1/10サイズの戦艦『大和』(26.3m)

呉という街

9月7日、広島駅から電車で約30分ほどの呉市にある大和ミュージアムへ取材に訪れた。呉市は戦前から造船業の街として発展した。造船業は国の技術力を表すというほど様々な技術が取り入れられており、当時の技術力が船として残されている。その中で生まれたのが戦艦『大和』だ。大和ミュージアムでは、大和の他にも魅力のある艦船の模型や資料などが展示されており、大和以外の魅力も楽しめる。

超弩級戦艦『大和』

戦艦大和は大和型1番艦として1941年に就役し、史上最大の主砲46cmを搭載した超弩級戦艦である。46cm砲は最大で約42kmの有効射程を持つ。『大和』の由来は奈良県旧国名の『大和』に由来している。

大和型は他に『武蔵』『信濃』の3隻が建造された。火力もさることながら装甲も世界有数だ。

上甲板側部は230mmのMNC鋼、艦側上部から410mmのVH鋼、喫水線以下（赤い部分）210mmのMNC鋼にもなる厚い装甲に守られており、当時、徹底した機密保持下で建造されている。MNC鋼とはモリブデン入りニッケルクロム鋼のこと。

『大和』の最期は沖縄戦の「天一号作戦」特攻作戦。アメリカ軍の空母艦載機による集中攻撃を受け、坊ノ岬沖海戦にて、1945年4月7日14時23分に沈没した。

海軍から学ぶ
歴史と技術とは

大和ミュージアムには大和の他にも魅力的な展示品がある。その例として次の2つをおすすめしたい。

ヤーロー式ボイラーを搭載した戦艦『金剛』は1931年にイギリスで建造された戦艦だ。搭載したボイラーは三胴式で、三角形状の配置により、構造が頑丈で高い効率で蒸気を生成することが出来る。

↑戦艦「金剛」に搭載されたヤーロー式ボイラー

このシンプルな設計と効率的な蒸気生成は、歴史の中で重要な技術革新だった。

もう一つは零戦の名前で知られる『零式艦上戦闘機六二型』。

零戦五二丙型や五三型の胴体下に250kgの爆弾を搭載した戦闘爆撃機型、500kg爆弾を搭載した特攻機としても使用された。

↑零式艦上戦闘機六二型

歴史に触れ
自ら考える旅へ

今回は大和ミュージアムの学芸員、杉山聖子さんに話を伺うことが出来た。その一部を紹介する。

ミュージアム創設について聞くと「呉市という場所は明治22年に鎮守府として海軍の拠点が創設され、以降海軍の町として発展しました。その歴史や近代社会の歴史を伝えるために大和ミュージアムを創立されました」

来訪者、特に高校生にどのようなイメージを持ってほしいのかという質問に「大和の10分の1を見て、ただ、かっこいいだけで終わって欲しくない。そこから一歩踏み込んで、この船はどうやって作られたのか、その作られた背景ってどんなものなのだろうということを調べてもらいたい」更に戦争の悲惨さや平和への大切さをどう考えて欲しいのかという質問では「まずは歴史を学んでもらいたい。平和を感じるためにも、日本がどういう歴史を歩んだのか、なぜそのような選択をしたのかを自分なりに考えて欲しい」という言葉を頂いた。令和7年2月中旬から令和8年3月末までリニューアル工事予定。

休館中は『ビューポートくれ』仮展示室『大和ミュージアムサテライト』において展示される。最後に杉山さんから高校生に「是非、大和ミュージアムに来てもらって教科書では学べないことを一つでも興味関心を持って探求してほしい」という言葉をもらい取材を終えた。機会があれば是非、呉を訪ねてほしい。（西）

呉の魅力スポット

アレイからすこじま

この場所は、呉駅から車で約10分にある撮影スポットだ。名前の由来は『からすこじま』と英語の小道（アレイ）からきたもの。世界でも珍しく、間近で潜水艦や護衛艦が見れる公園として有名だ。

→護衛艦『いなづま』

掃海母艦『ぶんご』

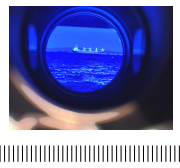
↑改修後の護衛艦『かが』

↑係留している海上自衛隊の潜水艦

てつのくじら館

『てつのくじら館』は、海上自衛隊呉史料館として知られており、実物の潜水艦『あきしお』が展示されていることで有名だ。特に『あきしお』は艦内の一部を見学することが出来る。『あきしお』内部の空間は狭く当時の潜水艦クルーの生活や任務の厳しさを物語っていた。

潜水艦にも長い歴史がある。最初期の潜水艦は長時間潜ることが出来ずにいたが、ドイツやアメリカが先駆けとなり、潜水艦の技術が発展していった。現在の海上自衛隊には25隻にも及ぶ潜水艦が就役している。


→潜水艦の潜望鏡とその中